

「老婆の物語」

— プラトン『ゴルギアス』のミュートスの意義 —

古 田 智 子

高 橋 憲 雄

プラトンの思想はおしなべて、彼の書いた個々の対話篇の文脈の中に徹底的に相対化されている。そうした文脈を単純に捨象して個々の対話篇の中に断片的に現れる同一テーマの思索を拾い集めて比較考察し、そのテーマに対するプラトンの思想を一般的・普遍的な形で再構成しようとしても、おそらくは全くの徒労に終わる。このことは、いわゆるプラトンのミュートスというテーマにもよくあてはまる。対話篇に現れるミュートスの意義は、それぞれの対話篇の文脈の中で考察されねばならず、その作業を抜きにしてプラトンのミュートスを比較し分類しその哲学的意義を語ってみても、的を外すだけである。プラトンのミュートスの哲学的意義を考察するためには、まず個々のミュートスをそれが現れる対話篇の文脈の中において、対話者の性格付けというようなことすら含めて考えた上で、そのミュートスが果たしている意義を綿密に考察すること、おそらくはスミークロロギアと思われるであろうような作業が、必須である。以下に試みられるのは、そうした作業の一つである。

I. 『ゴルギアス』篇のミュートス

『ゴルギアス』篇において、ソクラテスはカリクレスとの対話の締めくぐりに次のように語る。

「魂において多くの不正事に満たされてハデスの国へ行くことは、

すべての災悪の内では際たるものだからだ」(522e)。

そのことの理由付けとしてソクラテスは一つの物語を語る。もっとも、ソクラテスはその物語を「ミュートス」(物語)とは呼ばず、かえって「ロゴス」(論理的説明)であると述べている。

「では聞きたまえ、と人々は言う、きわめて美しい話を。それを君はミュートスだと考えるとわたしは思うが、わたしはロゴスであると考えている。というのも、わたしは、これから語りとうすることを真理であるとして、君に話そうと思うからだ」(523a)。

その物語の内容を以下に要約する。

クロノスから支配を継承したとき、ゼウスとポセイドンとプルートンはその支配を分割した。さてクロノスの時代から、今もまた永遠に、次のような法がある。すなわち、人間たちのうちで正しくかつ敬虔に生を送った者は、死後、至福者たちの島々へと去って行き、災悪を免れてまったき幸福のうちに暮らす。他方、不正に満ちて不敬神に生を送った者は償いと罰の牢獄へと赴く。それを人々はタルタロスと呼ぶ。

その裁きと裁定は従来、生きている裁き手が生きている者に対して、裁かれる者がまさに死なんとするその日に行われていた。そこで裁きはまずい仕方で行われることになった。というのも、多くの者たちは邪悪な魂をもちながら、美しい身体や家柄や富を纏い、また裁きのときには彼らには多くの証言者たちが付き従って、彼が正しく生を送ったと証言する。裁き手たちはそれらにまどわされて、また同時に自分たち自身も魂の前に目や耳や身体の全体を覆いとして纏いつつ裁きを行うものだから、これら裁く者たちの覆いと裁かれる者たちの覆いとが正しい裁きの邪魔をするのである。

そこでゼウスは、まず人間たちが自分の死を前もって知ることを止めさ

せた。次いで、裁かれる者は死んで裸になってから、また裁く者も死んで裸になって、魂そのものでもって魂そのものを裁くこととした。裁かれる者はすべての同胞・同族の者から一人引き離され、すべての飾りを地上に残し、そのようにして裁きが正しく行われるように計らおうとした。そのためゼウスは、自分の息子のミノスとラダマンテュスとアイアコスとを、彼らが死ぬと裁判官にし、至福者たちの島々へと向かう道とタルタロスへと向かう道が別れる三叉路に配置することとした。

以上が物語の全体であるが、ソクラテスはその物語から次のような帰結を推論する。すなわち、死とは魂と身体という二つのもののお互いからの分離に他ならない。分離の後、両者はそれぞれ人間として生きていたときにもっていたその在り様を少なからず保ち、身体がその自然的素質と世話のあり方と受動的経験のすべてを明らかなものとしてもつと同様、魂も身体から離れて裸になって、その自然的素質と受動的経験とを明らかなものとしてもつ。

そこで魂が裁き手たちの前に来ると、裁き手はただその裸の魂そのものだけを見て、それが何ら健全なものをもたないのを見ると、直ちにタルタロスの牢獄へと送り、そこでその魂はふさわしい罰と報いを受けることとなる。

他方、敬虔にまた真理とともに生きた魂を見て取ると、それはとりわけ自分のことを行い余計な手出しを行わなかった哲学者の魂であるが、それを至福者たちの島々へと送る。

ソクラテスいわく、彼はこれらの話を信じて、裁き手に自分の魂が出来る限り健全なものに見えるよう熟慮するのであり、多くの人間たちの名譽には別れを告げて真理を気遣いつつ出来る限り最も善く生きること、かつ死ぬときは死ぬこと、に努めているのである。

以上のように語った上で、ソクラテスはカリクレスに向かって次のように言う。

「おそらくこれらはちょうど老婆のするミュートスとして語られたと君には思えるだろうし (*ταῦτα μὴθὸς σοι δοκεῖ λέγεσθαι ὡσπερ γράος*), 君はそれらを軽蔑することであろう」(527a)。

この話がカリクレスを説得しえないであろうことをソクラテスは初めから自覚している。おそらくわれわれもカリクレスと同じく、それを「老婆の物語」のようなもの、きわめて素朴で非哲学的な信仰、と思うであろう。そればかりではなく、そのような物語が真理として結末に語られることによって、『ゴルギアス』篇の論理的探求としてのエレンコスの全体が真理として示してきた正しい生の優越性、正義と幸福の一元性という結論が御伽噺めいたものにほかさればしないか。なにゆえにこれらの話が語られなければならないならなかったのか。このミュートスが『ゴルギアス』篇において占める意義は何であるのか。これらの問題を考察することがこの小論の課題である。

II. このミュートスの特徴

ソクラテスはこの話を「ミュートス」ではなく「ロゴス」であって「真理」であると語りはするが、この話を特徴づける第一のものはいわゆる「エレンコス」(吟味・論駁)と呼ばれる論理的・ロゴス的な議論との対照性である。

「魂において多くの不正事に満たされてハデスの国へ行くことはすべての災悪の内では際たるものだからだ」(522e)と語るとき、そしてその理由の説明としての物語を「ロゴス」であり「真理」であると語る時、ソクラテスはその語られることからの真理を、文字通りの意味においてであるかどうかはさておき、確信している(Cf. *ἂ ἐγὼ ἀκηκοῦς πιστεύω ἀληθῆ εἶναι*, 524a-b)。この真理の確信という点において、少なくとも見掛けだけは、この物語とエレンコスとは共通している。「エレンコス」においても、例えば、善ないし幸福と正義との一元性を主張するとき、また「不

正を犯すことは不正を受けることよりも大きな災悪である」とか、「不正を犯しながら罰を受けない者は最も惨めである」とか主張するとき、ソクラテスはそれを初めから真理であるとして語る (Cf. eg. 473b)。しかし「エレンコス」においては、その主張が論理的な吟味にかけられ、それが「論証」される。ソクラテスがこれらの主張を初めから真理として語るのは、そのような吟味がこれまでも繰り返されて、それらの主張がその吟味・論駁をくぐりぬけてきたからであろう。論理的吟味の裏づけがソクラテスの確信の基礎をなしている。

それに対して、「魂において多くの不正事に満たされてハデスの国へ行くことはすべての災悪の内で際たるものだ」という主張は、その真理性の確信をもって語られるけれど、少なくとも【ゴルギアス】篇においては、その主張は論理的な吟味を受けることは全くない。ソクラテスのその主張についての真理性の確信はいわば極めて主観的・情緒的なものであって、論理的な裏づけを欠いており、従ってその主張は一種の素朴な信仰にすぎないようにも思える。

このことは、幸福ないし善と正義との一元性という主張が論理的な批判と吟味を受け付けるものであるのに対して、不正な魂のハデスの国での受難という主張は本来神話的なことがらであってもとも論理的な吟味を受け付けられないものであることを、必ずしも意味してはいないかも知れない。ともかく【パイドン】では後者がある意味での論理的な吟味に曝されるからである。とはいえ、やはり【ゴルギアス】篇では、その真理性の確信には論理的な根拠が示されていない、あるいは論理的な根拠がない、と言えよう。この論理的吟味の無さという点において、この物語は真理性を強調されつつも、あるいは真理性を強調されるからこそ、エレンコスと対照的である。

またもう一つのきわめて自明の特徴は、【ゴルギアス】篇のエレンコスが事實的・現実的なことがらに関わるという性格をもつものに対して、この物語は死後の生といういわば非現実的な対照的な内容のものであることで

ある。既に述べたように、このことは後者が原理的に論理的な吟味を受け付けないということでは必ずしもないし、従って非現実的という形容は必ずしも適切ではないが、にもかかわらず「ゴルギアス」篇ではこの対照は際立っており、エレンコスがこの世の事実的なことがらに徹底して関わるのに対して、この物語は死後の生といういわば非現実的あるいは非現世的なことがらを内容とする。

ただこの自明な対照それ自体はそれほど驚くには値しないことかもしれない。むしろ驚くべきことは、エレンコスが事實的・現実的なことがらに関わり、物語が死後の生の在り方に関わるという明瞭な対照がありながら、物語の内容は極めて現世利益的な傾向のものに思えることである。すなわち、この世の生を正しく敬虔に生きた者の魂は死後に至福者たちの島々に赴き、完全な幸福を享受するであろう、だから正しく生きねばならない、正しく生きれば得をする、という内容である。これを現世利益的と形容することにはもちろん語弊があるだろうし、またプラトンのあるいは古代ギリシアの道徳哲学がいわゆる「ユーダイモニズム」的で「エゴセントリズム」的な性格を多かれ少なかれ持っていることも事実である。しかしそうしたことを割り引いて考えてみても、少なくともそこには「超越」というような性格はほとんどない。死後の幸福を目的に、いわばその手段として現世において正しく敬虔に生きることを選ぶという、「交換」の性格があるだけのようにも思える。極論すれば、この物語は現世における正しい生という苦難を引き受けうるものとする虚構と見なされなくもない。おそらくカリクレスはこの物語をそのような価値を転倒したものと解するであろうし、一般的にもそうした解釈を被るかもしれない。そしてその解釈が正しいとすれば、それはまさしく「老婆の物語」と呼ばれてしかるべきであろう。

Ⅲ. 「身体は墓場」説との関連

しかし「ゴルギアス」篇の末尾のミュートスを素朴な信仰として直ちに

片づけるのではなく、その意義をより深く考えてみなければならないであろう。そのためには、いわゆる「身体（σῶμα）は墓場（σῆμα）」（ソーマ=セーマ）説についてまず考察せねばならない。というのもこのソーマ=セーマ説は、テキストに明確な指示はなくとも、死を身体と魂の分離と見なす末尾のミュートスと明らかに内容的な関連をもっているからである。

このソーマ=セーマ説の提示される文脈は注目に値する。それはソクラテスがカリクレスとの対話を通じて、カリクレスの考えを先鋭的で明確な形で引き出し、ソクラテスとの意見の不一致を際立たせた直後で提示される。すなわち、カリクレスいわく、

「いや真実においては、ソクラテスよ、あなたはそれを追求していると言うのだが、こういうことなのだ。贅沢と放埒と自由が、それを裏付ける力を獲得するとき、それが徳であり幸福であるのであって、あれら他のことがら、自然に反した人間たちの約束事は、もったいぶつた飾りであり、ばかげた戯言であって何の価値もないのだ」（492c）。

それに対してソクラテスは、カリクレスが他の人たちが心に思いながら語ろうとはしないことがらを明確に率直に語ってくれたと述べ、カリクレスの見解を改めて確認し、自らの考えとの対照を際立たせる。

「人が然るべき人間であらんとすれば、諸々の欲求を懲らしめるべきではなく、それらを最大限に解放してやり、それらに対して充足をどこかから準備してやらねばならない、そしてそれが徳である、と君は主張するのだね」。—「わたしはそう主張する」。—「では何一つ必要としない人々が幸福な人であるというのは正しく語られてはいないことになる」。—「そうとも、というのもそんなふうであれば石や死体が最も幸せなことになろうから」。—「しかしまた君の語るような在り方の生もものすごいものだろうよ」（492d-e）。

このようなやりとりの後、ソクラテスはエウリピデスのことば、「誰が知ろう、生きていることが死んでいることであり、死んでいることが生きていることであることを」、を引用し、「われわれは本当はたぶん死んでいるのだ」と語った後、ソーマ=セーマ説を導入する。

「というのもかつてわたしは賢者たちの誰かから聞いたこともあるのだ。すなわち、われわれは今死んでおり、われわれの身体は墓場であり、他方、魂のそこに諸々の欲求が内在する部分は、ちょうど意見を変えて上へ下へとひっくり返るようなものなのだ」(493a)。

このいわゆるソーマ=セーマ説は、それ自体では非常に奇妙な感じを与えるものであり、意味が判然としない。身体を墓場とし、魂のそこに諸欲求が内在する部分を説得されやすいものとする対比が曖昧である。しかしそれに続く説明を参照し、また【パイドン】篇で語られることがらを先取りして念頭に置くことによって、大方の意味は理解されるように思われる。

すなわち、ソクラテスはこれに続けて、シケリアかあるいはイタリアの誰か精妙な人がこのソーマ=セーマ説に関連して物語風に語る(μυθολογῶν)話を説明する。その精妙な人は、魂のその部分を説得されやすい(πιθανόν, πειστικόν)ために甕(πίθος)と呼び、無思慮な者たち(ἀνοήτους)を穴のあいた者たち・秘儀を受けていない者たち(ἀμυήτους)と名付け、無思慮な者たちの魂のそこに欲求が内在する部分を、満たされぬものであるがゆえに、穴のあいた甕と名付けた。

この話の意味するところはこうであるとソクラテスは語る。すなわち、ハデスの国の人々のうち(τῶν ἐν Ἅιδου)で彼ら秘儀を受けていない者たちが最も惨めであり、彼らは穴のあいた甕に別のそのような穴のあいた篩でもって水を運んでいるのである。篩とは、ソクラテスに語った精妙な者によれば、魂のことであり、無思慮な者たちの魂を、それが不信と忘却のゆえにしっかりと保つことができないので、穴のあいたものとして篩

に喩えたのである。

ソクラテスはこの話をする事によって、満たされることなく放埒な在り方をする生に代えて秩序だって手元にあるもので満足する生を選ぶように、カリクレスを説得しようとする。

もちろんカリクレスは死後の生の在り方を云々するような話によっては説得されない。そこでソクラテスは同じ学派に由来する別の喩え(εἰκῶν)を語る。それは節度ある人の生と放埒な人の生との比較に関わる。すなわち、これら二人の人の各々にたくさんの甕があるとす。節度ある人の甕は健全で一杯になっている。ある甕は酒で、別のは蜜で、また別のは乳でというように。それらのものは流れ出る源が希少で得難く、多くの困難な労苦によってはじめて獲得される。節度ある人は一度満たされれば注ぎいれることもなく気をもむこともなく、安心している。他方、放埒な人は、その流れの源は同様に希少で得難いのに、入れ物は穴があいていて不健全で、常にそれを満たすことを強要される。さもないと非常な苦痛に悩まされるという。

この喩えでもってソクラテスは節度ある人の生が放埒な人の生よりも幸福なものであることをカリクレスに説得しようとするが、やはりカリクレスは説得されない。

これら二つの物語風の話、ないしは喩えは、一見奇妙なソーマ=セーマ説をある程度は説明してくれる。最初の物語風の話は「ハデスの国にいる人たち」の生の在り方、来世における生の在り方を物語るものであり、次の喩えは現世における生の在り方を物語る。ソクラテスは死後の生の在り方を云々するような話によっては説得されないカリクレスに対して、節度ある人と放埒な人とのこの世の生の在り方を比較することで説得しようとするのであろう。それはそれで話の筋道が通るが、生きている者が死んでハデスの国に赴くという昔話あるいは信仰からすれば、話の順序としては後者が先のものであろう。

生きていることが死んでいることであり、死んでいることが生きている

ことだというエウリピデスのことば、また身体は墓場であるという説、これらは、『パイドン』篇で語られることがらを念頭に置くなら、生きていて身体をもつとき、それに由来する様々な欲求に魂が隷属し、魂がそれから解放されて自己の（おそらくヌースとしての、Cf. ἀνοήτους）主体的な生を営めないことを物語るものであろう。カリクレスの主張においては、まさしく諸々の欲求（ἐπιθυμῖαι）こそが解放され実現されるべき人間の主体と見なされ、思慮ないし理性はそれらの欲求に仕えてそれらを実現する手段的なもの（ἐπικουρία）と見なされる。そしてそれらの欲求はデーモス（カリクレスの恋人でもありアテーナイの民衆でもある）に対したときのカリクレスと同様、あるいはデーモスそのものと同様、常に意見を変えて上へ下へと引っ張り返るのである。そしてそれは知を愛するソクラテス、あるいは愛知そのものと対照的な在り方をする。

おそらく、死後の生の在り方はこの世の生の在り方によって規定されるものと考えられている。この世において人間にあっては、身体と魂、また魂のうちの欲求が内在する部分とその他の魂の部分とが対立する。放埒な人にあるのは身体に、また魂のそこに欲求が内在する部分に、思慮としての魂、あるいは魂の全体が隷属する。死後、魂が肉体から分離しても魂は生前のその受動的経験をとどめ、放埒な人の魂は魂のうちの欲求が内在する部分からは解放されず、ハデスの国においても欲求の内在する部分に隷属する。

これらの解釈は『パイドン』を先取りして念頭に置くものではあるが、大方は妥当なものであろう。『パイドン』において語られる「死の練習」（μελέτη θανάτου）ないし「浄化」（κάθαρσις）としての哲学という概念の萌芽が見られると言ってよい。しかしそれは『ゴルギアス』篇においてはあくまで萌芽的なものに留まり、続く議論の中でより深く展開されるといったことは全くない。その一つの理由は、『ゴルギアス』篇の文脈の中においては、カリクレスがそれらの話に全く説得されないからである。なるほど、末尾のミュートスにおいて死が身体と魂の分離であるとされ、

その物語風の話が引き継がれるが、しかしそこでも浄化としての哲学というようなものは語られず、死後の裁きの物語が語られるだけである。

ソーマ＝セーマ説とそれに続く二つの物語風の説（特に最初の話）はいわば尻切れ蜻蛉に終わってしまっている。だとすれば、それがどのような意図で導入されたのか、末尾のミュートスと同様にその意義と適切さが問題になるように思える。

この問題を考えるに当たって重要と思えるのは、ソーマ＝セーマ説が導入される文脈である。既に述べたように、このソーマ＝セーマ説は、カリクレスの考えとソクラテスの考えとの不一致が最も明確にされたところにおいて提示される。放埒な生が幸福か、節度ある生が幸福かという見解の対立である。このような意見の不一致は、典型的には論理的探求としてのエレンコスの出発点となるものであるが、ここではソクラテスは直ちにエレンコスを行うのではなく、一種の物語に訴えて、カリクレスを説得して彼の考えを変えさせようとする。しかしそれは全く成功しない。この物語風の話がカリクレスを説得し得ないであろうことは、おそらくソクラテス自身が最もよく自覚していることであろう。ならばこの物語風の話が導入されるのは、おそらく実はカリクレスの説得を目指してではなく、別の意味をもつと考えられよう。それはどのような意味か、またひいては末尾のミュートスがどのような意味をもつのか、それを考えるためには、ソーマ＝セーマ説やミュートスの内容の検討と同様に、それが提示される文脈の検討が是非必要であるように思える。

IV. ソクラテスの擬似的対話

ソーマ＝セーマ説がカリクレスを説得し得なかった後、ソクラテスはエレンコスに訴えて、カリクレスを吟味・論駁してゆく。その議論は快樂の分析から始まり、快樂と善、苦痛と悪との不一致という結論へと向かう。確かに、快樂をすべて解放し、それを充足させることが徳であり幸福であるというカリクレスの見解は、快樂と善との無条件的な等置を含意するよ

うに思われる。またソーマ=セーマ説に続く第二番目の話は、満たされた節度ある生と、いわば常に垂れ流し、常に欲求を満たさねば非常な苦痛を感じるという放埒な生との対比を行うものである。その限りで、ソーマ=セーマ説を置き去りにするとはいえ、快樂分析へと向かい快樂と善との同一性を否定するというこの議論の方向性は自然なものである。ただしこれ以降の議論はカリクレスの道德批判にみられるある種の積極的意義を無視するものであるようにも思われるが、おそらくソクラテス自身がいわゆる通俗道德に対しては批判的であって、カリクレスの道德批判の肯定的意義をある程度は認めているものと思われよう。ソクラテスはカリクレスに対する吟味・論駁を通じて節度と徳一般の肯定を行うが、そこで肯定される徳はカリクレスが否定する通俗道德とは異なる意義と内容を与えられる。

ソクラテスのカリクレスに対する吟味・論駁はかなり長く豊富な内容をもつが、その要点は、カリクレスがソクラテスに答えることを拒否し、ソクラテスが自分一人で擬似的な対話を行わざるを得なくなる、その擬似的対話に集約される(506c-508c)。以下、それを簡単に要約する。

快と善とは異なる。快のために善を行うべきではなく、善のために快を行うべきである。善とは、それが具わることによってわれわれが善き人となるところのものである。われわれが善き人であるのは、また一般に善きものが善きものであるのは、徳が具わることによる。各々のものの徳は整序(τάξις)と正しさと技術によって最も見事に具わる。各々のものの徳は整序によって整えられ秩序づけられる。各々のものの固有の秩序(κόσμος)が各々のものをして善きものたらしめる。自らの秩序をもつ魂は秩序のない魂よりもより善い。秩序をもつ魂は秩序ある魂である。秩序ある魂は節度ある魂である。節度ある魂は善き魂である。節度ある魂は、相応しいことを行うことによって、正義の魂であり、敬虔な魂であり、勇敢な魂である。節度ある人は正しく勇敢でかつ敬虔であって、完全に善き人である。善き人は善く行い幸福な人であり、邪悪な人は悪く行い惨めな人である。邪悪な人とは放埒な人である。

幸福たんとする人は節度を追求し心掛けねばならず、放埒を避けねばならない。これが生の目標であり、至福であらんとする人にとっては、正義と節度が具わるように、そのように行為せねばならないのであって、諸々の欲求を解放してそれに充足を与えるよう試みるべきではない。というのも、そのような放埒な人は他の人間にも神にも好まれないから。というのも、協調（κοινωνία）するということができないからであり、協調が内在しない人に友愛（φιλία）はないから。賢者たちが語るように、天をも大地をも神々をも人間をも協調と友愛と秩序と節度と正義とが統括しており、それゆえにこの万有は宇宙秩序（κόσμος）と呼ばれるのである。

そして最後にソクラテスはカリクレスに対してこう語る。「君はわたしにはこれらのことに対して注意を払っていないように思える、しかも君は賢者だというのに。君は気づかないのだ、幾何学的平等（ἡ ἰσότης ἢ γεωμετρική）というものが神々のあいだでも人間たちのあいだでも大きな力をもっているということに。そして君は多くを取ること（πλεονεξία）を心掛けねばならないと思っているのだ。というのも君は幾何学（γεωμετρία）を等閑にしているからだ」（508a）。

以上において、カリクレスに対する論駁は大方尽きている。ノモス（νόμος）をピュシス（φύσις）に対比して、道徳（通俗的な意味での節度と正義を核とする）を平均者の打算に由来するもの、自然本来的な根柢のないものとして否定し、「贅沢と放埒と自由が、ひとたびそれを裏付ける力を獲得するとき、それが徳であり幸福である」と、また「欲求を最大限に解放し、それを満たしてやらなければならない」と主張するカリクレスに対して、ソクラテスは節度（σωφροσύνη）を中核とする徳の概念を打ち立てる。そしてその徳の概念を、人間の約束事や慣習（ノモス）を越えてすべてあらゆるものに通底する宇宙万有の自然的な在り方（ピュシス）、幾何学的平等の支配へと接続するのである。カリクレスの道徳批判の根底にあるノモス—ピュシスの対立図式を突破して、ソクラテスは道徳の新たな意味付け、ないし基礎付けを行うのであり、そしてそれは一種の宇宙論

を指向していると言えよう。「ゴルギアス」篇ではこれは単なる指向にとどまるが、われわれはそのような一つの完成形を後期著作のたとえば「ピレボス」篇において見出すことができる。そこでは「限」と「無限」と「混合体」と「原因」という四つの類を用いての大々的な宇宙論が展開され、それに基づいて善き生の在り方が規定される。

ここにおいてわれわれはソクラテスとカリクレスの思想の興行きないし射程の違いを明瞭に見て取ることができる。カリクレスの道徳批判は、近代のことばを使って言えば、民主主義における道徳のイデオロギー的性格を暴露し、平等理念に対する偶像崇拜を打破するという革新的な意義をもつ。しかしその道徳批判の根底にあるノモスーピュシスの対立図式、すなわちノモスを自然的根拠なき人為としてピュシスの絶対性に対置して相対化し無化するという論理は、時代の一つの思潮にとどまり、せいぜい弱肉強食の動物界や、あるいは人間の国家や民族の闘争と盛衰の歴史への参照を通じてもっともらしさを獲得するだけであり、それ自体が時代の一産物にすぎない。カリクレスの思考はそのような時代と現実とに固着してそれを一歩も出ることがない。にもかかわらずそうした思考と論理をカリクレスは絶対化して考え、自己の思考そのものの時代性と相対性を自覚することがない。それに対してソクラテスの思考は時代と現実とに立脚しつつ、どこまでも自己の思考そのものの相対性を自覚しながら、あるいは自覚すればこそ、時代を脱却し、その時代と時代の問題の基底に横たわるピュシス全般の解明へと赴かざるを得ない。例えば一つの道徳的問題はどこまでも時代の問題であり、時代の問題として引き受けられねばならないと同時に、それへの回答は時代をも歴史をも越えたピュシス全般の解明を要求するのである。ソクラテスの思想は、また古代ギリシアの思想一般は、そのような卓越した洞察に基づいて展開されると言えよう。もっともこのピュシス全般の解明という課題は途方もなく大きく、それについての思索が未熟な自然哲学と解釈されたり、神話的な形而上学ないし神話そのものと解釈されたりする宿命は免れないけれども。

V. 議論の二つの指向性

ソーマ=セーマ説に続く二つの物語風の話は「パイドン」で語られる「死の練習」としての哲学、あるいは「浄化」としての哲学を指向していると言える。それに対して、その後のエレンコスにおける議論は最終的にはピュシス全般の解明への必然性に接続し、「ピレボス」篇に典型的に見られるような宇宙論的な背景をもつ道徳哲学を指向していると言える。これら二つの指向性は、ことがらとしては密接に関連し宇宙における人間の位置の究明という一つの課題に収斂するが、「ゴルギアス」篇においては独立し分離したままであり、またそれ自体としても深くは展開されていない。この分離と未展開の問題は、もちろん、プラトンの思想的発展の段階との関連で理解されるべきことであろうが、また一つには「ゴルギアス」篇の主題と、また答え手としてのカリクレスの理解と態度に関わる「ゴルギアス」篇の内的・文脈的な限定とも関連付けて考えられよう。本論ではプラトンの思想の発展史的な考察を一応視野の外におき、「ゴルギアス」篇の内的・文脈的な限定に即してこの問題を考えていきたい。

「ゴルギアス」篇の主題とは、批判を恐れずごく大雑把に言えば、ソクラテスを刑死させたアテナイの政治的現実を厳しく告発し、ソクラテス哲学を擁護し、それが内包する道徳哲学的・政治哲学的可能性を展開することにある。なかでも、政治的現実の弾劾とたたかいが中心となり、その政治的現実を代表する者が時代そのものとしてのカリクレスである。そのようなカリクレスを相手に、時代をまた歴史をも越えた超越を指向する哲学を大々的に展開することは無理があると言わねばならない。時代の思潮そのものであるカリクレスの道徳否定と野蛮の論理の根底にあるピュシス・ノモスの対立的図式を突破することが一つの大きな課題となっている。そしてそのことは幾何学的平等の力を示唆することで一応は果たされていると言えよう。超越を目指す哲学を展開することは「ゴルギアス」篇の課題の限定からして無理なことであり、幾何学的平等の力の示唆さえソクラテ

ス一人による擬似的対話の中で初めて可能だったのであろう。

「愛知」としてのソクラテスの哲学は、どこまでも政治的現実とたたかいつつも（例えば、どこまでもカリクレスを対話相手としつつ）、常にその現実を超出しようとする衝動を内包する。それはカリクレスにはどこまでも理解の及ばないものだった。ソクラテスとカリクレスの議論が最後まで平行線をたどること、またソクラテスが擬似的対話ないしモノローグを余儀なくされること、そしてまたソーマ=セーマ説が尻切れ蜻蛉に終わること、これらの意味は、そこから理解されるべきものであろう。

ソーマ=セーマ説で示唆されながら【ゴルギアス】篇では全く未展開のままの超越を指向するそのような哲学の一つの形態を、われわれは【パイドン】の中に見出すことができる。典型的には63e-69eにおいてである。そこでは「死の練習」ないし「浄化」としての哲学という概念が展開される。死は魂の肉体からの分離・解放として規定され、哲学者はその生にあって肉体から逃れて魂だけとなることに努めることが語られ、いわゆるアイデア論が提示され、魂だけになることにおいて真理（ἀλήθεια）と知（φρόνησις）が獲得されうることが説かれる。愛知とは肉体から魂を脱却せしめる浄化（κάθαρσις）であり死の練習に他ならない。そしてその哲学においてのみ真の徳（ἀληθὴς ἀρετή）が実現される。それはより大きな快樂を得るために当座の小さな快樂を慎むといった類の「交換」（ἀλλαγὴ）を本質とする通俗的な徳ではなく、知（φρόνησις）を中核として成立する全き徳である。

以上に簡単に要約した【パイドン】篇の箇所においては、【ゴルギアス】篇で物語風に示唆されただけのソーマ=セーマ説がある意味でロゴス化されて一つの思想として展開されていると言える。例えば、至福者たちの島々における全き幸福という神話的なことがらが「知」と「真の徳」の獲得という一定のロゴスの表現を与えられる。そしてその思想もケベスの疑問に依って更なる論理的な吟味に曝され、魂の不死性の論理的な証明という課題に引き継がれて、ついには生成と消滅と存在の原因全般の追求というピュ

シス全般の究明へとつながり、『ゴルギアス』では分離したままの議論の二つの指向性の一つに融合される。『パイドン』篇においては、『ゴルギアス』篇の末尾で提示される一見素朴で非哲学的と思えるミュートスが、『パイドン』の課題と内的文脈において可能なかぎり、ロゴス化されているといってもよいであろう。もちろん『パイドン』においてすら魂の本性と、魂の宇宙における位置というようなピュシス全般の在り方に関わる問題がすべてロゴス化されて解明されるというようなことはありえず、その末尾でも宇宙における人間の位置を主題としたミュートスが語られる。

VI. 末尾のミュートスの意義

『ゴルギアス』篇末尾のミュートスは、ソクラテス哲学が超越を必然的に指向しつつ、『ゴルギアス』の対話的文脈の中でそれがはたし得ないという状況を考えあわせるならば、その意味するものが明らかになってくるように思える。一見非常に素朴な信仰と思え、カリクレスならずとも「老婆の物語」と思えるようなミュートスの中に、超越を指向する哲学が形をなさぬまま包含されている。その哲学はプラトンの哲学の発展とともに、あるいは異なる文脈の中におかれることで、形をなしロゴス化されることもある。

クロノスから継承した支配をゼウスとポセイドンとプルートンが分割したこと、クロノスの時代からの永遠の法として、正しく生を送った者が至福者たちの島々に赴き、不正に生を送った者はタルタロスへと赴くこと、従来の裁きの仕方の身体という覆いゆえのまずさ、それをゼウスが改めて身体を脱ぎ捨てた魂が魂を裁くようにしたということ、ゼウスが自分の息子のミノスとラダマンテウスとアイアコスとを彼らの死後に裁判官とし、至福者たちの島々へと向かう道とタルタロスへと向かう道が別れる三叉路に配置したというようなこと。以上のようなミュートスは文字通りの物語に思えるけれど、ソクラテスはその物語から次のような帰結を推論して見せた。すなわち、死とは魂と身体の分離に他ならず、分離の後にも、身体

のみならず魂もその自然的素質と受動的経験とを明らかなものとしてもつということ。そこで裁き手はただその裸の魂そのものだけを見て裁定を行い、何ら健全なものをもたない魂をタルタルスの牢獄へと送り、その魂にふさわしい罰と報いを受けさせ、他方、敬虔にまた真理とともに生きた魂を見て取ると、それを至福者たちの島々へと送るということ。

物語に続くこれらのソクラテスの推論は、一面において確かに現世的利害に関わる性格をもつとも受け取れる響きをもっているが、それをカリクレスという時代に執着する自己理解をもつ人間に対する語り掛け（本気で説得を意図したものではないであろうが）として割り引いて考えれば、時代と現世的利害に固着する人間の自己理解とは異なる自己理解を可能にする要素を含み持つと言えよう。そしてそれは原理的には、例えば『パイドン』篇におけるような形で、ロゴス化可能なものと解釈されうる。

『ゴルギアス』篇のミュートスの中には、いかなる生を選択すべきかという問題を自己理解の革新を通じてより深く考えさせるものが含まれている。カリクレスの思考は全く時代の思潮の中に飲み込まれている。それに対するソクラテスの吟味・論駁は事実的・現実的なことがらをめぐってなされ、一つのロゴスの表現を獲得している。しかし道徳的問題についての考察は、それを徹底的に遂行しようとするれば、時代をも歴史をも越えて、いわばその基底にあるピュシス全般の考察を要求する。『ゴルギアス』篇においては文脈的限定のゆえに、またおそらくはプラトンの思想的発展の段階に関連して、そのような考察はなされていない。そのようなピュシス全般の在り方をロゴス化しようとする考察の代わりに、ミュートスが語られていると言えよう。このミュートスは、エレンコスによって差し当たってロゴス化され証明されたかぎりのものの基底に存する、まだロゴス化されていないことがらについて語る、という意義をもつと言えよう。そしてそれ自体はロゴス化されてはいないがゆえに、素朴で非哲学的な信仰の形を纏うこともありうるということが理解されよう。

だがそれにしても、『ゴルギアス』篇のミュートスはあまりにも素朴す

ぎると思われるかもしれない。このミュートスが素朴な信仰の外見を纏う理由は、種々推測されよう（それはあくまで推測にとどまるが）。

一つは、このミュートスは、『ゴルギアス』篇の文脈において、時代と現世的利害に固着した自己理解にとられるカリクレスに向けた語り掛けであるということである。そのような語り掛けとしては、例えば『パイドロス』における美しく洗練されたミュートスよりも、素朴なミュートスがふさわしくあるかも知れないし、カリクレスのような人物に対してはある意味で効果的であるかも知れない。エレンコスによって論駁されても説得されることのないカリクレスが、そのようなミュートスによって説得されるとは確かにあまり考えられない。彼はおそらくそのミュートスを「老婆の物語」と見なすことであろう。しかし彼がエレンコスによって論駁された後に、このようなミュートスによって自らの自己理解を多少とも揺るがされるということはあるであろう。そのミュートスが素朴であるだけに、そこにいわば理解しがたいなにかを認め、不安を抱くかも知れない。物語は意識の下層にある何ものかに訴えかける力をもっていると言えよう。意識においてはその物語を一笑に付すことができようとも、意識下へのそのような訴えかけをはねつけることは必ずしもできない。「意識の下層」というような概念は決してアナクロニズムではない。エレンコスにおいて、典型的には、ソクラテスの対話相手は時代常識にとられ自明以外の何ものでもない見解とは矛盾する見解が自己の内に意識されぬままあることを示され、自己の内的矛盾に直面させられて自己理解の改変と実践的決断を迫られるのである。

もう一つの理由は、時代に通底する基底的なことがらを掘り下げつつ徹底的にロゴス化する試み、すなわちピュシス全般を探求する試みが、常に文字通りの神話と信仰に、あるいは似非学問的ないわゆる形而上学と化す危険性をプラトン自身がおそらく最もよく自覚していたからではなからうかと思われる。プラトンは例えば中期著作の『パイドロス』や『国家』で、また後期著作の『ピレボス』や『ティマイオス』で、ピュシス全般の在り

方についての考察、魂の本性や、魂の宇宙における位置などについての考察を、ある意味でロゴスの的に展開する。哲学は必然的にそのような問題についてのロゴス化の試みへと突き進んでいかざるを得ない。しかしその同じプラトンが、独断的形而上学の不毛さを最もよく自覚し、閉じた体系としての形而上学を忌避しているように思われる。それゆえにこそ、プラトンはミュートスという語りをを用いるのではなかろうか。『パイドロス』におけるミュートスも、いわゆるイデア論や想起説や自己運動者としての魂といったプラトン哲学の重要なテーマを含みながら（含むからこそ）、体系的形而上学ではなく、ミュートスの装いをもって語られるのであろう。『ゴルギアス』の素朴なミュートスも、そうした文脈において理解されるように思える。

最後に、『ゴルギアス』の末尾において語られる物語をソクラテスがミュートスではなくロゴスであり真実であると語ることの意味について考察しなければならない。ゼウスとポセイドンとプルトンの支配の分割やら、正しく生を送った者が至福者たちの島々に赴き、不正に生を送った者はタルタロスへと赴くことや、裁きの仕方の改善やら、ミノスとラダマンテウスとアイアコスによる裁判の話やら、これらを文字通りの真実とソクラテスが考えていると受け取ることは到底できない。しかしこの物語は、既に述べたように、善ないし幸福と正義との異・同の問題を時代の思潮と歴史を越えてより深く考えさせる内容をもっている。そしてそれはロゴス化されうる可能性をもつ。善と正義の異・同という問題は、そのような深い考察をまって初めて解決されうると考えられているのであろう。この物語は時代に固着した自己理解を突破して、新たな自己理解を切り開くことを可能にする内容をもつと言ってもよい。ソクラテスがこの物語を「ロゴス」であって「真理」であると語る一つの理由は、その物語が内包するもののロゴス化の可能性と必然性に関連してであるように思われる。

もう一つ推測される理由は、より実践的なものである。善と正義の異・同というような道徳的問題は時代と歴史を越えて、その基底にあるピュシ

ス全般の究明をまっぴらに始めて回答されうる。しかし同時にこの道徳的問題は時代の問題でもあり、時代にある生身の人間が引き受け回答すべき問題でもある。ソクラテスはエレンコスを通じて善と正義の同一性を論証し、それを「真理」であると語る。しかしその真理とは縮約され相対化された対話の各々すべての文脈の中で不同のものとして成り立つという意味での真理である。その問題を時代を越えてより深く徹底して考察するためにはピュシス全般の究明を必要とする。だからこそおそらくプラトンは、善と正義の同一性の主張が鉄と鋼の論理（σιδηροῖς καὶ ἀδαμαντίοις λόγοις, 509a）で縛られたと語りつつ、すぐ後で自分は何も知らない（ἐγὼ ταῦτα οὐκ οἶδα ὅπως ἔχει）と語る。その問題の回答はピュシス全般の考察を要求するのであるが、しかし実践においては常にその間に応え続けなければならない。ミュートスを「真理」であると語ることは、そのミュートスの中核にある善と正義の同一性という主張を実践的仮説として引き受けることを意味するであろう。それは無批判に前提されるものではなく、常にエレンコスによって批判的に吟味され確かめられるべきものであり、またさらには時代と歴史を越えて、それに通底するピュシス全般についての究明を要求するものではあるが、ソクラテスの行為においては実践的仮説として「真理」となされるのである。